吐息なす憂悶の日もとのといき えれ白き辛夷よ

流りゅうひょう 寂莫のまどろみも去り オホーツクの水やわらぎて の群軋める国

朽葉ぬき頭 もたげし若き息吹 彷徨のい着きしを知 に

は

わが若き日の昏迷を掻く

高澄の日高の峠 ける太陽に酔い痴れて

ああ慵げき虚を破りて わだつみの青をば追わん

及る雄お 叫た

ヹ

が若き日の胸に響かん

地の熟睡静かに温むた達の真情を凝らしただ。 こころ こころ の曠野に励け Ť

選逅に結ぶ灯火 がいこう むす ともしい 逆巻の吹雪は狂と 白皚々 うす月は雲をどよませ つき 々と六華は咲け う

بخ

明晰ないで持ちて凝視る道にいます。まないであった。まないであるまである。またいであるというできません。 濃き鈍色ににじみそめつも が霹靂の痕を印さん

野末遙 けき

> 小川 脇 地 徳 炯 君 君 作曲 作 歌